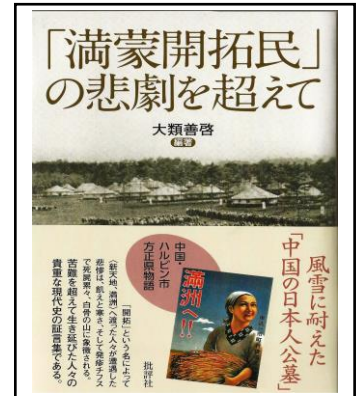


# 中国業務通説

大類善啓編著『満蒙開拓民』の悲劇を超えて』（批評社 2024年6月）を読む

旧知の大類善啓氏（以下、大類さん）から表題の本（以下、本書）を贈られた。早速一読、感想を書く。

1945年8月15日に大日本帝国は昭和天皇の詔により敗戦の日を迎えたが、国策で中国の満蒙（注）に送られた満蒙開拓民は日本政府からも満州国からも見捨てられた。多くの開拓民が、自力で日本への帰還を目指す途中に寒さや病に倒れたりして命を失った。中国黒竜江省哈爾濱市郊外の方正県は1960年に5,000人近い開拓民を葬る「日本人公墓」を作った。2005年に「日本人公墓」を多くの日本人の知ってもらい、国境を越えた人々の友愛精神を広めていこうと「方正友好交流の会」が設立され、会報「星火方正」を毎年2回発行している。大類さんは交流の会の設立と会報の発行に当初から関わってきた。本書にこの間の事情が詳しく書かれている。



注：満蒙とは満州（黒竜江省、吉林省、遼寧省の中国東北3省）と中国領の内モンゴル（内モンゴル）のこと。内モンゴルはいま中国の内モンゴル自治区となった。鎌倉時代に蒙古襲来（元寇）をなした蒙古族、モンゴル族の国家はいまモンゴル人民共和国である。

今年も先月8月15日に79回目の敗戦の日を迎えた。日本政府はこの日を終戦記念日と称し、毎年、天皇陛下が出席して政府主催の全国戦没者追悼式を開いた。この日、岸田内閣の3人の閣僚（新藤義孝、高市早苗、木原誠二）がA級戦犯を祀る靖国神社に参拝した。戦没者追悼式と靖国神社参拝は両立しないと思う。

1941年12月8日に大日本帝国は米国のハワイ真珠湾に奇襲攻撃を行った。大本営発表「帝国陸海軍八本八日未明西太平洋に於て米英軍ト戦闘状態ニ入レリ」。半年後の1942年6月5～7日にかけて中部太平洋ミッドウェー島周辺で日本海軍とアメリカ海軍によるミッドウェー海戦が戦われた。この海戦で日本は保有空母9隻のうち4隻（赤城、加賀、蒼龍、飛龍）を失い、米国は保有空母7隻のうち1隻（USS Yorktown）を失った。日本側の死者は3,057名、米国側の死者は362名。

この海戦で日本は大敗し、日米戦争の勝敗が決着した。しかし、日本は1945年8月15日のポツダム宣言（無条件降伏通告）受諾までの3年余、勝ち目のない戦争を続け兵士と国民の死者を増やし続けたのだった。

本書の表題にある「満蒙開拓民の悲劇」は2つの悲劇が有るだろう。

1つ目の悲劇。地方の貧しい農民がお国からウソをつかれ、騙され、半ば強制的に満蒙に送り込まれたこと。大日本帝国は1931年の関東軍による満州事変を経て、1932年に傀儡国家「満州国」を建国した。そして満州国経営のため1936年に国策の「満州農業移民100万戸移住計画」を立てた。結果的に満州国建国の1932年から敗戦の1945年までの13年間に約27万人が満蒙開拓団として満州、内モンゴルに入植した。開拓団は全国から募集され、分村と言う村単位で全村民が移住した村、代表例が長野県大日向村、もあった。開拓団の出身地は長野県が約3万4千人と最も多かった。また、1938～1945年に、16歳から19歳の青少年を満蒙開拓青少年義勇軍として約8万6千人が国策で移民団とともに満蒙に送りこまれた。

1945年の敗戦時、満洲には軍人と軍属、満洲国役人と家族、民間人など155万人の日本人が住んでいた。8月15日の昭和天皇の玉音放送（敗戦の詔）の直前に、満洲にいた軍人と軍属、国役人と家族は民間人を置き去りにして、自分たちだけ特別列車を仕立てて、日本に逃げ帰ったのだ。1946年から1948年までの日本への引き揚げ者は105万人に上った。敗戦時に約22万人の開拓民がいて、その大半が老人、女性、子供であった。自力で日本に生きて戻った人は約14万人、帰国を果たせず亡くなった人は約8万人だった。帰国しようとする逃亡の途中で、病により亡くなった人もいた。さらに、病にかかった婦女子や幼な子が逃亡の足手まといになるとの理由で集団圧力により親族、身内から毒を盛られたり、扼殺されたりして命を奪われた。このことが本書「子を遺棄し、絞め殺し」（63ページ以降）に書かれている。

2つ目の悲劇。敗戦により、開拓民はお国と満洲国から見捨てられた。その結果、残留邦人と残留孤児が発生した。日本へ引き揚げず中国にとどまった日本人、多くは婦女子、が残留邦人だ。日本への引き揚げの途中で、足手まといになるなどの理由から中国人に預けられた、託された幼な子が残留孤児だ。

残留邦人、残留孤児の帰国は民間主導で始まった。1972年の日中国交正常化により日本政府の帰国事業が始まり、現在までに国費で永住帰国した中国残留婦人等は4,168人、中国残留孤児は2,557人、一緒に帰国した家族を含めると総数20,912人となっている。



本書の「天を恨み、地を呪いました」に松田ちよさんの人生が描かれている。松田さんは1919年山形県に生まれ、1941年に家族（夫、1歳の長女）3人で開拓団となり満洲に入植した。敗戦後、逃亡生活の末、方正県にたどり着き、中国人男性と再婚する。松田さんも日本政府から騙され、見捨てられるという2つの悲劇を味わった。松田さんが苦難の末、1991年に家族とともに日本に戻るまでの詳細は本書に譲る。

松田さんがたどった運命は松田さん一人だけではなく、何千人、何万人もの多くの満蒙開拓民もたどった。

戦後79年たったいまも日本政府は満蒙開拓民、中国残留邦人・孤児の処理に誠意をもって取り組んだことは一度もない。追い込まれて嫌々取り組んだのだ。

日本政府は満蒙開拓民、中国残留邦人・孤児を見捨てた。日本政府は1945年の敗戦時に沖縄県民を見捨てた。日本政府は2011年の東日本大震災被災者と東電フクシマ原発被災者を見捨てた。日本政府は2024年の能登半島地震被災者を見捨てた。日本政府はいずれすべての日本国民を見捨てることになるだろう。

日本国民の生命と財産の安全を脅かすのは北朝鮮のミサイルや、中国の軍事的脅威ではなく、日本政府、自民党政権そのものだと思う。国民は北朝鮮のミサイル開発を止めることはできない、中国の軍事力強化を止めることもできないが、自民党政権を止めることはできる。

自民党は戦犯、戦争を指導した高級官僚らが作った政党で、いまでもその末裔、姻族が党と政権を支えている。自民党政権は中国侵略や朝鮮、台湾の植民地支配を正当化し、この国を戦前の国家体制に戻そうとしているのだが。それでも自民党政権を望む大和民族。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」（ドイツの宰相オットー・フォン・ビスマルクの言葉）。日本人は戦前も戦後も、歴史から何も学ばなかった。（横井幸夫 元東レ株式会社）